

動脈・静脈の概念の初期的流入に関する日中比較研究

松本 秀士

提 要

西洋医学所说的“动脉”和“静脉”的概念，在中国传统医学上没有完全一致的。本稿先分析这些西洋医学概念，在中日两国最早的解剖书上，如何翻译的。最后，与其结果对比，来探讨中国传统医学上所说的“脉”的真实意义。

0. はじめに

中国伝統医学は『素問』『靈樞』¹、すなわち『黄帝内経』(以下、両書を特に区別しない場合には『内経』と呼称する)を經典として、その独特の医療を發展させ、周辺の漢字文化圏に影響を与えてきた。日本は古くより中国伝統医学に学びながら、それを漢方医学として独自に發展させてきたが、やはり『内経』を經典としている。今日、中国伝統医学・漢方医学は様々な方面から注目されるが、その多くが西洋医学的価値観に偏った評価によるといえよう。

近代的な西洋医学は解剖学を重視し、これを基礎に發展させてきた。そのことを背景にして、近代的西洋医学の日中両国への流入に関する従来の研究では、今日用いられる解剖学用語の初出、あるいは、西洋医学の諸概念のはじめての流入という表層的事項のみが焦点となる傾向にある。そうした側面も明らかにしていく必要はあるが、日中それぞれに起きた西洋医学との初期的接触において生じた医学思想上の独特の様相、すなわち、西洋医学の概念の流入をめぐる身体観の異同という本質的部分が明らかにされる必要がある。ことに、日中における西洋医学との初期的接触においては「動脈」「静脈」という中国伝統医学には完全に一致するもののない異質の概念が入ってきており、それらの訳語をめぐる医学思想上の核心的問題がみえる。

本稿ではそうしたことを踏まえた上で、西洋医学の血管系の語彙を焦点に、日中における西洋医学との初期的接触の時期にみる諸医書を検討し、中国伝統医学にみる本来の身体観を探求したい。

1-1. 玄白による動脈・静脈の語

杉田玄白(1733～1817)が、クルムス (Johann Adam Kulmus 1689～1745 独) 原著による *Anatomische Tabellen*(1722)のオランダ語版 *Ontleedkundige Tafelen*(1734)をもとに『解体新書』(1774)²を編訳することで、日本にはじめて体系的な西洋の人体解剖学をもたらしたことは周知の通りである。『解体新書』では西洋の血管系の最も基礎的概念である動脈・静脈に対して、「動脈」「血脈」の訳語が与えられている。玄白が「動脈」「血脈」の訳語を定めた経緯については、同じく玄白の『医事問答』(1795)³で述べられている。先ず、それらを記述順に抜き出し、以下に示したい。

全體和蘭人所説之經脈は、直に見候て定候事故、漢人所立とは大きに違ひ、十二經の十四經のと申事無御座候、去年中入御覽候約圖に新譯仕候通、動脈、血脈、筋、神經と四通より外無御座候

扱動脈は蘭語スラクアーデルと申候て、其管心臓より出て、徧身に分配仕候、又其支末の所にて、右動脈の血を受け、原の心に戻りいたし候血道御座候、是を蘭語ホルレアードルと申候、即血脈と訳仕候物にて御座候、此二脈運行往還の大小經絡及支別細條、周身所在錯綜如織、誠に絲瓜の絲の如にて御座候

動脈は心より出候てより、少しの滞なく流利いたし候血故、何れの所にてても総べて動有之、其表皮に近き所にては、上より診候ひとも其動知れ申候、是即漢人所説、動脈三部の類なり、扱スラクアーデルのアーデルは脈の事、スラクは脈のうつと申うつの意に御座候故、唐の字をかり、直に動脈と譯し申候、又血脈と申は、右に申候通、動脈支別微細の所より、此脈の微少の所に受け伝へ、原とへ返し申候物に御座候、下より上り候血故、浮絡起り申候、是帰路の正據也、動脈は裏を往き、血脈は表を還り申候、此還り行くホルレアードル、一名ブルードアーデルといふ、ブルードとは血の事故に、血脈と譯し申候

最も注意すべきことは、「十二經の十四經のと申事無御座候、去年中入御覽候約圖に新譯仕候通、動脈、血脈、筋、神經と四通より外無御座候」とあるように、玄白が中国伝統医学のいう「十二經」ないしは「十四經」、すなわち「經脈」の範疇で、西洋医学のいう動脈・血脈(今日の静脈)・筋・神經を捉えていることである。玄白は中国伝統医学の「經脈」を数え方の上で疑問視したのであり、それゆえ「動脈、血脈、筋、神經と四通より外無御座候」と強調しているの

だ。玄白が専ら中国伝統医学の考え方をもとに西洋医学を捉えようとしていることは、「動脈は…是即漢人所説、動脈三部の類なり」と述べられていることから明白である。つまり、玄白はオランダ語のスラクアーデル(Slag-ader 今日いう動脈)のもつ「脈打つ(Slag)」という意味を、中国伝統医学にみる「動脈」と捉えたのである。

玄白が「漢人所説、動脈三部」とあげているものは、中国伝統医学の経典『内経』に照らし合わせるならば、『素問』三部九候論篇第二十に「三部…有下部、有中部、有上部、部各有三候…上部天、兩額之動脈、上部地、兩頰之動脈、上部人、耳前之動脈(三部には下部・中部・上部があり、各部にはそれぞれ天地人の三候がある。上部の天に当たるのは額の両側で動ずる脈、上部の地に当たるのは頰の両側で動ずる脈、上部の人に当たるのは耳の前側で動ずる脈である)」とある記述がその源流である。それらは、実際に常に脈打つものではあるが、あくまで「経脈」上の「候」、すなわち徴候として論じられた「動脈」であるから、「脈」として表れる人の生命現象の動静、つまり、その身体がどのような経緯をたどり、現在どのような状態にあるのか、どのような病状にあるのか、あるいはその病状が将来どのような様相をみせるのか等を伺い知るためのものであるのだ。同書離合眞邪論篇第二十七に「經之動脈」とある記述もその前提のものであり、中国伝統医学のいう「動脈」を単に拍動する脈と解釈するのみでは、その前提が見失われてしまうのである。以上のように、中国伝統医学のいう「動脈」が今日の動脈・静脈の分類における動脈とは全く異質のものであるにも係わらず、玄白はそのことを充分鑑みることなく専ら表面的な意味の重なりで、スラクアーデルの語に対して「動脈」の訳語を与えたのである。

一方、玄白がオランダ語のブルードアーデル (Bloed-ader 今日いう静脈)のことで、玄白はブルードを「血」、アーデルを「脈」に対応させた)に用いた「血脈」の訳語も『内経』をはじめ、中国伝統医学で広く用いられてきたものであり、専ら表面上の意味的重なりを焦点に解釈している。つまり、西洋医学の伝える静脈の概念についても、玄白は中国伝統医学の考え方に基づいて捉えるのみで、中国伝統医学のいう「血脈」そのものについては一切検討することなく訳語として用いたのである。

1-2. 玄沢と玄真による動脈・静脈の語

次に、玄白に続く最も主要な西洋の人体解剖学の編訳書である大槻玄沢(1757～1827)の『重訂解体新書』(1730)、および宇田川玄真(1769～1835)の『医範提綱』(1805)の両書にみる動脈・静脈の訳語を検討したい⁴。

玄沢は『重訂解体新書』の身體元質篇第三名義解の篇等で、スラクアーデルが広義のブルー

ドアーデルであるがゆえに生じる「動脈」「血脈」の訳語の問題を論じている。スラクアーデルは広義のブルードアーデルであり、スラクアーデルに「動脈」、ブルードアーデルに「血脈」の訳語を与えることでは、少なくとも『解体新書』が底本としたオランダ語版 *Ontleedkundige Tafelen* が伝える心臓を中心とする血管系を的確に表現することはできないのである。そして、玄沢は「血脈」に動／静の反義語を冠した「動血脈」「静血脈」の訳語を新たに定め、解決を図ろうとしている。しかし、玄沢は自ら定めた「動血脈」「静血脈」の訳語を、完全にこなれた三字熟語として用いたわけではない。『重訂解体新書』で訳出された各種「動血脈」についてみれば、たとえば「頸動脈」「脾動脈」「横膈動脈」等の訳語が定められているように、「動血脈」ではなく、「動脈」の語を基本としている。同様に各種「静血脈」についてみれば、たとえば「頸脈」「脾脈」「横膈脈」等の訳語が定められているように、「静血脈」ではなく、「脈」の語を基本としている。つまり、玄白による「動脈」「血脈」の訳語に内在する問題を解決すべく新たに訳出された「動血脈」「静血脈」の三字熟語は、血管系の各訳語として直接的に用いられることはなかったのである。そのように、玄沢は実質的には今日いう動脈・静脈に対してそれぞれ「動脈」「脈」を最も基本的な訳語として動脈・静脈の各種語彙を定めるに終わっている。そして、玄沢はアーデルの原義を「動血脈」「静血脈」の別のない広義の「脈」と解釈した上で、中国伝統医学のいう「経絡」や「血脈」の概念がそれにあると捉えている⁵。結局、玄沢も玄白と同様、中国伝統医学の考え方で西洋医学のいう血管系を解釈したのである。

一般に、今日の解剖学用語である「動脈」「静脈」の初出は、玄真による『医範提綱』とされるが、同書においても『重訂解体新書』で訳出された「動血脈」「静血脈」の両語が引き継がれていることには注意を要する。『医範提綱』では「動血脈」「静血脈」の両語を引き継いだ上で、さらに「動脈」「静脈」の訳語も新たに加えたものである。そして、「動血脈」「静血脈」、ないしは「動脈」「静脈」の総称、すなわち広義の血管として「血脈」、あるいは「脈」の訳語を定めている。

玄沢・玄真の両者が、玄白が訳出した「動脈」「血脈」の語をそのまま採用したのではなく、それを「動血脈」「静血脈」の語で代えようとしたのは、広義の血管としての「血脈」に動一静を冠することで修辞上の調和を意図したといえ、すなわち、それは玄沢・玄真の両者が当時の日本に浸透した中国の伝統的な陰陽思想(すなわち陰一静、陽一動の対応)にごく自然に従ったものであるといえる。

ところで、玄白や玄沢が『解体新書』の編訳にあたって底本とした *Ontleedkundige Tafelen* はオランダ語訳のものであるが、そこに記載される最も基礎的な解剖学用語については特別にラテン語が併記されている。そこで念のために、血管系の語彙の基本である動脈・静脈、そして広

義の血管の三者を焦点に、底本のOntleedkundige Tafelenにあるラテン語をみておきたい。併記されるラテン語によると、今日いう動脈・静脈はそれぞれArteriae・Venaeとあるように異なる語で示されており、そして広義の血管についてはVasaの語が記されている⁶。しかし、オランダ語についてみれば、動脈はSlag-aders(slagは「拍動する」、adersは「脈」の意)、静脈はaders(単に「脈」の意)とあるように、動脈・静脈ともにadersの語を基本とするものであり、そして、広義の血管を指す語としてもadersが用いられている⁷。もちろん、玄白らは併記されるラテン語ではなく、専らオランダ語による記述に基づいて『解体新書』を編訳したのであり、オランダ語のスラグアーデル(Slag-aders)・アーデル(aders)を、それぞれ順に中国伝統医学の「動脈」・「脈」の概念によって捉え、訳語として用いていったのである。

ここで、『内経』のいう「脈の動静」の性質を提示しておきたい。先ず、『素問』脉要精微論篇第十七に「診法…切脈動靜(診断法には脈の動静をはかるものがある)」とある記述の中で「切脈」とはいわゆる脈診のことで、中国伝統医学で広く一般的に行われる手首の撓骨動脈上に人差し指、中指、薬指を同時にあててその脈拍を診る診断法である。続けて「動静」とあるのは「切脈」によって診ることのできる「脈」の状態を指すものである。同書病能論篇第四十六に「診右脉沈而緊。左脉浮而遲(右腕の脈が沈・緊の状態、左腕の脈が浮・遲の状態を診る)」とある脈診に関する記述をみれば、「脈」の具体的状態を「沈」「緊」「浮」「遲」の四つに分類している。つまり、『内経』のいう「脈」には常に何らかの「動静」を備えるものとしての意義があり、すなわちそれは身体全体の状態を映し出すいわば鏡でもあるのだ。もちろん、『素問』氣府論篇第五十九に「氣街動脈各一(左右の氣街に動ずる脈が各一つある)」、同書骨空論篇第六十に「毛際動脈灸之(毛際に動ずる脈に灸をする)」とある記述は、具体的に「氣街」「毛際」という特定の穴位、すなわちツボ上にみられる特定の拍動を指すものである。しかし、それらは『素問』三部九候論篇第二十の「上部天。兩額之動脈。上部地。兩頰之動脈。上部人。耳前之動脈」の記述(具体的に穴位の名称は示されていないが、一般的に、額両側の「動脈」とは「太陽」、兩頰の「動脈」とは「巨髎」、耳前の「動脈」とは「耳門」の穴位をそれぞれ指すが示すように、「脈」上の「候」、すなわち身体の状態・病の徴候として論じられた「動脈」であるのだ。「脈」は身体をめぐる「氣」の要所であり、その「氣」の「候」を具体的に「切脈」によって診るのが『内経』の脈診法であるのだ。すなわち、『内経』が論じる「脈」には、常に人の生命の根幹に通じる現象を映し出す何らかの動静を伴うものとしての意義が備わるのである。それは身体を越えた身体外の生命の根源、すなわち天地陰陽の世界に脈々と通じたものでもあるのだ。

従って、中国伝統医学がいう「動脈」は本来、玄白らをはじめ玄沢や玄真が理解したような西洋医学的な動脈としての「拍動する脈」とは根本的に性質を異にするものである。彼らは中

国伝統医学のいう「動脈」「血脈」の語の表面的字義でのみしか解釈しておらず、それらの根本的意義が全く視野に入っていなかったといわざるを得ず、結局、西洋医学のいう血管系を中国伝統医学のいう「経脈」の概念で捉えることに終始したものの、「経脈」そのものがもつ本質的意義については充分考慮するに至らなかったのである。

2-1. 明末来華宣教師による動脈・静脈の訳語

明末の来華宣教師テレンツ(Johann Terrenz Schreck 1576~1630 独 中国名；鄧玉函)が編纂した『人身説概』(1623)と、同じくロー(Giacomo Rho 1593~1638 伊 中国名；羅雅谷)が編纂した『人身図説』(成書年不詳)は、中国にはじめて近代的な西洋の人体解剖学を伝えた書として知られる。次にそれら二書にみる血管系の語彙を焦点に検討したい⁸。

『人身説概』において、血管系に関する記述は絡部と脈部の両篇にまとめられており、後者の脈部の篇には「脈與心常常動(脈は心臓と共に常に動いている)」と説明されるように、「脈」の語に含まれる拍動の意的確に捉えた上で、「脈」を今日いう動脈の訳語としたことがわかる⁹。さらに、同書同篇に「脈…堅而比絡更厚(脈は堅く絡よりもさらに厚い)」とあるように、「絡」を今日いう静脈の訳語としたことがわかる¹⁰。

『内経』には「絡」「経絡」「絡脈」等の記述がみられ、「絡」も「脈」と同様に「血」や「気」の流れるものを指すが、『内経』をみる限り「絡」そのものに拍動するという含意はみられない¹¹。『人身説概』脈部の篇に「無脈之處常有絡(脈のないところには常に絡がある)」とあり、『人身説概』で静脈の訳語として用いられる「絡」が、中国伝統医学の論じる「絡」を踏まえたものであることがわかる。

次に、『人身図説』をみると、論脈絡及絡脈何以分散の篇に「脈絡…當動」「血絡…不動」とあるように、「脈絡」「血絡」の語がそれぞれ今日いう動脈・静脈の訳語として用いられている¹²。そこで注目すべきことは、「脈絡」「血絡」に関してそれらの拍動の有無が述べられていることで、従って、「脈絡」の訳語も「脈」に備わる拍動の含意を踏まえたものであることは明らかである。また、「脈絡」「血絡」の語は「絡」の語を接尾語とする構造であり、「絡」の語がVasa等の動脈・静脈を区別しない広義の血管の概念で用いられたものである。

玄白らをはじめ、玄沢や玄真が広義の血管を「血脈」、ないしは「脈」と訳し、「脈」が本来もつ拍動の意を考慮しなかったのに対して、『人身説概』『人身図説』の両書では、「脈」に本来備わる根本的意義が考慮されながら訳語が定められており、明末の来華宣教師が単に血管系の形態面だけではなく、中国伝統医学で用いられる語彙の性質をより重視していたことがわかる。しかし、明末の来華宣教師が重視したものは、後述するように、あくまで様々な含意をもつ中

国伝統医学のいう「脈」のごく部分的内容でしかない。

2-2. モリソンとホブソンによる動脈・静脈の訳語

『人身説概』『人身図説』以降、西洋医学を体系的に伝える西学書は一時途絶える。そして、書誌の上では清代も終わりに近づいた頃ようやくそれは再開し、英国人医療宣教師ホブソン (Benjamin Hobson 1816～1873 中国名；合信) が西洋の解剖生理学の内容を中心にして編纂した『全体新論』(1851)の刊行を待つこととなる。その検討に先だって、清代における来華宣教師のパイオニアであるモリソンが、1819～1823年にかけて編纂した一連の『華英字典』¹³にみる動脈・静脈に係わる記述について触れておく。

『華英字典』は漢字の概念を英文で説明することに趣旨があるために、必ずしも明確に動脈・静脈の区別を中国伝統の身体語彙に与えてはいないが、はじめに「脈」の語について見ると「A vein of an animal body, the pulse, the blood flowing」とあるように、広義の血管、血管の拍動、そして、血液の流れであると説明されている。続いて、中国伝統医学独特の概念である「経脈」「経絡」の語についてみるとそれぞれ順に「the transverse blood vessels」、「the veins and arteries, the blood vessels」とあるように、いずれもthe blood vesselsを用いて説明されており、それらが広義の血管の概念で捉えられていることがわかる¹⁴。

次に、ホブソンによる『全体新論』(1851)、『医学英華字釈』(1858)の両書¹⁵について検討したい。両書において訳出された動脈の訳語をみると「血脈」「血脈管」、あるいは「脈管」が用いられている。『全体新論』ではさらに単独の「脈」の語によって動脈を表す例もある。つまり、先に触れた明末の来華宣教師による中国文西洋医学書同様に、ホブソンに至っても「脈」の語に含まれる「拍動」の意が重視されていたのである。そのことは、『医学英華字釈』に「Arteries or pulsating vessels血脈管」とあるように、pulsatingを用いて説明されていることから明らかである。

一方、『全体新論』で訳出された静脈の訳語は「廻血管」ないしは「廻管」で、それらは同書血脈運行論においてハーヴェイ(William Harvey, 1578～1656 英)の“血液循環説”が紹介されていることから、血液循環経路が心臓を中心とするものであることの意義が充分考慮されたものであることがわかる。『医学英華字釈』をみても「Veins or returning blood vessels 廻血管」とあるように、血管系が心臓を起点とするものであることを伝えている。つまり、「廻血管」「廻管」の訳語は、心臓に血液を返す血管であることを主眼にして意識されたものであるのだ。

以下に『全体新論』例言で述べられる血管に関する定義、および『医学英華字釈』で説明される血管系の語彙を示した。

『全体新論』例言

所稱血脉管、或稱養血管、或稱發脈管、本屬一管、其中有血有脉者是也、如廻血管或稱廻管、亦屬一管、導血回心、藍色無脉者是也、微絲血管、或稱微絲管亦然、若單稱血管二字、則總指三管而言

「血脉管」あるいは「養血管」「發脈管」と称するものは一つの「管」の分類上のもので、その中には血があり、脈動するものである。「廻血管」あるいは「廻管」と称するものもまた一つの「管」の分類上のもので、血が心臓にもどるのを導き、藍色で脈動のないものである。「微絲血管」あるいは「微絲管」もまた一つの管の分類上のものである。ただ単に「血管」と称する場合には、それら三分類の「管」を総じていったものである。

『医学英華字釈』

Arteries or pulsating vessels 血脉管

Veins or returning blood vessels 廻血管

Capillaries or very minute vessels 微絲血管

Aorta or great artery 總脈管

Coats of the blood-vessels 血管之體三層

上記の『全体新論』例言で、動脈に与えられた「發脈管」の別称は、先にあげた『医学英華字釈』に記される「pulsating vessels」の考えに基づく訳語とみられる。一方の静脈に関する説明では「導血回心(血が心臓にもどるのを導く)」「無脉者(脈動しないもの)」とあるが、敢えて後者ではなく前者の意を採用して「廻血管」、ないしは「廻管」の訳語としたことがわかる。また、広義の血管を表す訳語として「血管」も定義されているが、自ら創出した「廻血管」「微絲血管」の語をそれぞれ「廻管」「微絲管」と縮めているだけでなく、あるいは「一管」「三管」とみえるように、単独の「管」の語にも広義の血管の意味をもたせていることがわかる。

一方、上記の通り、『医学英華字釈』において広義の血管の原語にあたるものはblood-vessel、ないしはvesselsで、vesselsはラテン語のvasaに由来するものである。オランダ語を介した間接的なものではあるが、vasaの語はオランダ語版*Onleedkundige Tafelen*にも示されることから、結果的に玄白らが『解体新書』においてvasaに対して「血脉」の訳語を与えたこと、そして明末の中国文西洋医学書が「絡」、ないしは「血絡」の訳語を用いたことと比較すれば、ホブソンがそれらを「血管」、ないしは「管」の概念で捉えたことは大きな特徴といえる。

ここで、「管」の語を焦点に『靈枢』をみると、本藏第四十七の篇に「胃下者、下管約不利…胃結者、上管約不利也(胃の位置が低い者は、胃の下に続く管が緊縮して通りが悪い。胃結の状態にある者は、胃の上に伸びる管が緊縮して通りが悪い)」とあるように、今日の食道(「上管」)や十二指腸(「下管」)等の部位を指す語として「管」が用いられるのみである。明清代の中国伝統医学の各書に掲載される「藏府図」では、今日の気管に相当する部位を「肺管」、今日の食道に相当する部位を「胃管」の語を用いて示している。つまり、中国伝統医学本来の「管」の概念は、あくまで西洋医学のいう血管系の概念とは一線を画すものであるのだ。そのように中国伝統医学のいう「脈」と「管」とは本来同一線上のものではなく、従って、中国伝統医学のいう「脈」は本来、西洋医学の血管系の概念とは明らかに異質のものであるのだ。しかし、中国伝統の医家である王清任(1768~1831)による『医林改錯』(1830)¹⁶に示される「親見臟腑図」では、今日の大動脈、ないしは頸動脈に相当する部位を「気管」、大静脈に相当する部位を「血管」と称しており、それは中国伝統医学本来の捉え方から逸脱した特異なものとなっている。

『医林改錯』は1830年に刊行されたもので、その中で論じられる「気管」「血管」の語は、少なくともそれよりも前の中国伝統医学の流れではみられない。また、モリソンが1819~1823年にかけて編纂した一連の『華英字典』をみても「管」に対して「bamboo or any tube」の語積があるのみで、「気管」「血管」の語に関する記述は一切見当たらない¹⁷。従って、中国伝統医学の流れでいわれてきた「脈」は、清任によってはじめて「管」の概念で捉えられ、そして「気管」「血管」の語で表現されたことがわかる。そして、その「管」の概念は、ホブソンによって西洋医学の知見が加えられ、受け継がれたと考えられる。

ところで、『医林改錯』氣血合脉説の篇には「気管行氣、氣行則動、血管盛血、靜而不動、頭面、四肢按之跳動者、皆是氣管(気管は氣を行かし、氣が行くのに応じて動ずる。血管は血を盛り、静かにして不動である。頭部や顔面、四肢を押さえたときに跳動するものはみな気管である)」、同書心無血説の篇には「心乃是出入氣之道路、其中無血(心は氣の出入りする道路であり、中は無血である)」と説明されることと、先に述べた同書親見臟腑図における「気管」「血管」の記載とを併せれば、清任が今日いう大動脈、ないしは頸動脈、そして心臓については「血」ではなく、「氣」の流れるものであると捉えた上で、「気管」と名付けたことがわかる。特に、同書心無血説の篇では心臓内が「無血」であると述べられているように、血液が静脈内に滞ってしまうために、心臓内や動脈内から血液が抜けて、あたかも「空」の状態になるという死体が無造作に解いた場合にみられる特有の現象を、清任は自らの観察で目にしていたものとみられる。しかし、清任のいう「氣」に西洋科学の気体の概念はみられず、また清任のいう「気管」は純粋に「氣」のみを通わすものではなく「津液」、すなわち今日のいう体液をも通わすと捉え

られたものでもある¹⁸。

『全体新論』血脉運行論の篇には「昔人屢剖死者觀之。見脉管無血而空。疑爲氣管(昔の人はしばしば死者を解剖して観察し、脈管に血がなく空であることをみて、気管であると考えたのであろう)」とあるように、ホブソンは西洋の古い時代に脈管(今日いう動脈)が「気体の通る管」と認識されていたことを紹介している。つまり、ホブソンは『医林改錯』で示された「気管」の語を「気体の通る管」と捉え、それが誤りであるとして、敢えて西洋における古人の誤謬を紹介したとみられる。しかし、先に述べたように清任のいう「気管」は必ずしも「気体の通る管」と断定し得ない面をもつ。少なくとも、ホブソンは清任のいう「気管」を慎重に解釈したわけではなく、専ら『医林改錯』に描かれた「親見臟腑図」という視覚的情報のもとに誤りと判断したものとみられる。

なお、先述のようにホブソンは静脈を「廻血管」と訳出しているが、「回血管」の語としては『医林改錯』に示される「親見臟腑図」の中にすでにみられる。中国伝統医学上において「回血管」の語は『医林改錯』が初出となる。しかし、『医林改錯』では腠臓という局所にある腠静脈等を指して「回血管」の語が用いられたのであって、ホブソンや今日いう静脈の概念に完全に一致するものではない。『全体新論』血脉管廻血管論の篇では、「廻血管者。回導紫血入心之管也(廻血管は静脈血が心臓にもどるのを導く管である)」とあるように、「回」の字を用いて静脈血が心臓にもどる様子を説明しながらも、あえて「廻」の字を用いて「廻血管」としており、それは『医林改錯』のいう「回血管」と区別を図ったものとみられる¹⁹。

2-3. ポスト・ホブソンにおける動脈・静脈の訳語

ホブソンの後に来華した米国人医療宣教師オスグッド(Dauphin William Osgood 1845~1880 中国名; 柯為良)は、ホブソンがなし得なかった専門レベルでの人体解剖学の伝播と、体系的でより学術用語として適した人体解剖学の中国語訳の確立を明確に意図して『全体闡微』(1881)を編訳した²⁰。同書で血管系に関する記述は、全體經絡論の篇にまとめられている。中国伝統医学の「經絡」の語が篇名に用いられてはいるが、この篇で実際に論じられているのは純然たる西洋の人体解剖学の血管系に関する内容である。また、「經絡」の語そのものも血管系の各部位の訳語として用いられているわけではない²¹。

オスグッドが『全体闡微』において体系的な解剖学用語としての中国語訳の確立を意図したことは、全體經絡論の篇において動脈・静脈に対して定めた訳語をみても明らかで、それらはそれぞれ順に「脈管」「廻管」である。それら「脈管」「廻管」の訳語は、ホブソンによる訳語(先述「血脉管」「廻血管」等)を基本としながらも、二字熟語で統一されている。ホブソンが今日い

う毛細血管を「微絲血管」と訳出したのに対しても、「微管」の訳語としている。また、広義の血管に当てられた訳語は「血管」である。なお、同書同篇では「或言脉或言脉管其意一也(脈あるいは脈管と称するものはみな同じ意である)」の自注がみられるように、「脈管」の語の他に単独の「脈」の語も動脈の訳語として用いている。つまり、オスグッドが「脈」に備わる拍動の意、そしてそれが管状の形態であることを特に重視して訳語を定めていったことがわかる。

以下に、『全体闡微』における血管系の語彙の中で、最も主要なものをあげた。なお、原語(英語)が示されるものは、それも付記した(括弧内には原語に対する日本語訳を付した。原語が示されていないものについては、中国語訳に対する日本語訳とした)。同様に、オスグッド以降に刊行された清末の来華医療宣教師による各編訳書等として、ダッジョン(John Dudgeon 1837～1901 英 中国名；徳貞)の『全体通考』(1886)、ポーター(Henry Dwight Porter 1845～1916 米 中国名；博恒理)の『省身指掌』(1891)、およびコースランド(Philip Brunelleschi Cousland 1861～1930 英 中国名；高似蘭)『医学辞彙』(1908)における血管系の主要語彙も以下に示した²²。

『全体闡微』(オスグッド；柯為良)

脉管 Arteries(動脈) 脉(動脈) 廻管 Veins(静脈) 血管(血管)
微管 Capillaries(毛細血管)

『全体通考』(ダッジョン；徳貞)

脉管(動脈) 回血管(静脈) 回管(静脈) 血管(血管) 微絲管(毛細血管)

『省身指掌』(ポーター；博恒理)

脉管 Artery(動脈) 廻血管 Veins(静脈) 血管 veins(血管)
微血管 Capillaries(毛細血管)

『医学辞彙』(コースランド；高似蘭)

脈、脈[月官] Artery (動脈)

盪、盪[月官] 音荒、回血[月官] 也 Vein (静脈)

絡、血[月官] Vessel blood (血管) 絡 Blood vessel (血管)

微盪、音微、微與血合而成、即盪[月官] Capillaries vascular (毛細血管)

脉、血湧 Pulse (脈拍)

コースランドの編纂した『医学辞彙』は清末の医療宣教師による医学語彙の中国語訳の集大成として、大きな意義をもつものである。コースランドは西洋医学の各語彙の中国語訳を定めるにあたって新たな漢字の創出も行っており、より適した中国語訳を定めようとした意図は非常に明確である。血管系の語彙については、「脈管」「回管」を基本としながらも、「管」の字については竹冠ではなく、偏を肉月とした[月官]の字としている。そのように、身体語彙として相応しいように肉月につくる字に改めたことは、形態面をより重視する西洋の解剖学の精神を反映したものといえよう。

「脈」の字についてはそれを流れる血液に視点をおいて、偏を血に代えた「脈」の漢字としている。清代の康熙帝勅撰による『康熙字典』は、近代中国以前につくられた最大の字書であり、その時代までの字書の集大成として位置づけられる。同書によると「脈」は、「脈」に通じるものである²³。

「回管」に用いられた「回」の字については、血管系の語彙により適したものとして、「血」につくる「盪」を採用している。『康熙字典』で「盪」は、「血上心也」と字義が説明されるように、西洋医学の視点で見れば一応は静脈の概念に重なるものである²⁴。

毛細血管については、「微管」の語をモチーフに、これが血液を通すものであることから「血」につくる「盪」を訳語としている。それは『康熙字典』にはみられないことから、『医学辞彙』で独自に定められた漢字であると考えられる。

『医学辞彙』の定めた新たな中国語訳には一応の合理性がみられるが、問題点も存在する。盪の字は、全くの『医学辞彙』独自の合成であり、それを如何に普及させるかという問題を伴う。先の[月官]の漢字については、音は「管」に通ずるものの、『康熙字典』による語釈では「胃腑」「脘」とあるように、いずれも「胃」を意味するものであるから、それを血管を表す漢字として定義することは、[月官]の本来の字義を全く考慮しておらず、従来との混乱という問題を新たに生じさせてしまう。また、『医学辞彙』がそのように肉月や血につくる漢字を解剖学用語として新たに定めた一方で、Blood vesselの訳語については糸偏の「絡」が定められており、不統一感を否めない。糸偏を改めた「絡」「略」等の訳語とするのがより適切である²⁵。

以上のように、コースランドが『医学辞彙』で西洋の解剖学用語に対して定めた中国語訳には問題点もあるが、そこには西洋の解剖学的視点を如何にして盛り込むかという意図が非常に強くみられる。少なくともコースランドまでの来華医療宣教師たちは、西洋の解剖学的視点を根幹とした体系的な中国語訳を定めることによって、西洋の解剖学を正確に中国に伝えようとしたことがわかる。そして、その中でも中国伝統医学独特の「経脈」の意義は、血管系という西洋の形態学的視点による概念に置き換えられていったのである。つまり、中国伝統医学の「経

脈」に備わる本来の意義は、結果的に風化させられていったのである。

3. 『内経』における「経脈」の意義

以上のことを踏まえた上で、次に中国伝統医学の経典『内経』を読み解きながら、「経脈」の本来の意義を探りたい。『靈枢』本藏第四十七の篇に「経脉者、所以行血氣、而營陰陽、濡筋骨、利關節者也(経脈は血・気を行かすもので、そのことによって身体の陰陽を営み、筋骨をうるおし、関節を利するものである)」とある記述から、「経脈」が「血」と「気」を全身にめぐらすものであると同時に、「筋骨」を潤し「関節」の動きを良くするはたらきをもつものであると捉えられていることがわかる。つまり、「経脈」のはたらきは今日のいう血管外で起こる生理的現象、すなわち、血中の成分が血管外に浸みだして特定部位でその作用が発揮されることまでをも含むものであるのだ。

『素問』氣府論篇第五十九をみると「足太陽脉氣所發者、七十八穴…足少陽脉氣所發者、六十二穴(足太陽の経脈上で気を発するツボは七十八ある…足少陽の経脈上で気を発するツボは六十二ある)」とあるように、「気」が「経脈」上の「穴」(すなわちツボ)から発せられることが説明されており、血液を通す血管という側面だけで「経脈」を認識するのは、明らかにその含意を狭めてしまうことがわかる。そのことは、『靈枢』邪氣藏府病形第四の篇に「十二経脉、三百六十五絡、其血氣皆上于面、而走空竅(十二経脈と三百六十五の絡を流れる血・気は、みな顔面に上り、空竅におよぶ)」とあるように「空竅」、すなわち身体の深層部と身体外部とを貫くいわば通路としての目・耳・鼻・舌に、「血」「気」の両者の作用がおよぶものとされていることでも明らかである。つまり、「経脈」を流れる「血」「気」の作用がおよぶ範囲は、今日いう血管系の範囲をはるかに越えたものであるのだ。従って、『内経』のいう「経脈」は、今日いう血管系に限定したものとは明らかに一線を画す概念であるのだ。

『内経』のいう「血」「気」、ないしは「血氣」の由来は、先天・後天の「精」であり、特に、後天の「精」は天地の「気」、すなわち今日いうところの酸素や摂食物由来の栄養素等を含むものである。『靈枢』經水第十二の篇にある次の一節には、摂食物と「経脈」との関係についての記述がある。

経脉十二者、外合于十二經水、而内屬于五藏六府、夫十二經水者、其有大小深淺廣狹遠近、各不同、五藏六府之高下小大、受穀之多少、亦不等、相應奈何、夫經水者、受水而行之、五藏者、合神氣魂魄而藏之、六府者、受穀而行之、受氣而揚之、経脉者、受血而營之…凡此五藏六府、十二經水者、外有源泉、而内有所稟、此皆内外相貫、如環無端、人經亦然

十二経脈は、外は十二の経水につながり、内は五藏六府に属す。十二経水には、大小・深淺・広狭・遠近があり、各々違いがあるように、五藏六府の高低・大小・受ける飲食物の多少もまた各々異なる。対応はどうかといえば、経水が水を受けこれを通すように、五藏は神・気・魂・魄をあわせて蔵し、六府は飲食物を受けてこれを通し、飲食物から気を受けてこれをめぐらせる。経脈は血を受けてこれを営む…五藏六府や十二経水はみな、外に源泉をもち、体内においてこれを受ける。内外は相貫かれたものであり、環に端がないのと同じであり、人の経脈もそのようである。

「経脈」を流れる「血」の由来は、摂食物からの「気」であり、「血」「気」の両者は「五藏」に貯えられる。人の生命は、摂食物を直接的な媒体として外界と通じる。そして、人の生命はあたかも外界と同期しながら、十二の「経脈」の基礎の上に営まれるというのだ。

『靈枢』逆順肥瘦第三十八の篇に「手之三陰。從藏走手。手之三陽。從手走頭。足之三陽。從頭走足。足之三陰。從足走腹(手の三陰は五藏から手に向かい、手の三陽は手から頭に向かい、足の三陽は頭から足に向かい、足の三陰は足から腹に向かう)」とある記述では、「手太陰肺経」「手少陰心経」「手厥陰心包経」の三者(すなわち手の三陰)が「肺」「心」「心包」の三つの「藏」から手の方向に、そして、「手陽明大腸経」「手太陽小腸経」「手少陽三焦経」の三者(すなわち手の三陽)が手から頭の方に、そしてまた、「足陽明胃経」「足太陽膀胱経」「足少陽胆経」の三者(すなわち足の三陽)が頭から足の方向に、そして最後に、「足太陰脾経」「足少陰腎経」「足厥陰肝経」の三者(すなわち足の三陰)が足から「脾」「腎」「肝」の三つの「藏」の方向に向かって、「血」「気」がそれらの「経脈」を流れるものであることを示している。つまり、「経脈」を流れる「血」「気」が、「藏」から手、手から頭、頭から足、そして足から「藏」へと循環するものであると捉えられているのだ。『靈枢』邪客第七十一の篇に「天圓地方。人頭圓足方以應之(天は円く、地は四角い。人の頭が丸く、足が四角いのはこれに対応したものである)」とある記述を踏まえれば、身体における十二の「経脈」の方向性は、頭を天、足を地とした考え方の上であり、従って、「経脈」を流れる「血」「気」は、究極的には身体を越えて天地を貫くものであると捉えられていることがわかる。

さらに、『靈枢』脉度第十七の篇には「手之六陽。從手至頭…足之六陽。從足上至頭…此氣之大經隧也(手の六陽は手から頭に至り…足の六陽は足から頭に至り…これらは気の大経隧である)」とあるように、手から頭への気の流れをもつ「手陽明大腸経」「手太陽小腸経」「手少陽三焦経」の三者(ここでは手の三陽を両手に数え、手の六陽としている)、および、頭から足への「気」の流れをもつ「足陽明胃経」「足太陽膀胱経」「足少陽胆経」の三者²⁶(ここでは足の三陽を両足

に数え、足の六陽としている)を特に「大経隧」と呼称している。それはつまり、頭を頂点とする身体が、両手足を合わせた十二陽の「経脈」によって、より直接的に天に通じるものと捉えられていることを意味するのである。そして、十二陽に対する十二陰の「経脈」も十二陽とつながるものであるから、間接的ではあるが十二陰の「経脈」もやはり天に通じるものであると捉えられていることがわかる。

身体が天地を貫いたものであるという視点は『素問』でも同様にみられ、陰陽應象大論篇第五に次のように記される。

天地者萬物之上下也…陽者其精并於上．并於上．則上明而下虛．故使耳目聰明．而手足不便也…陰者其精并於下．并於下．則下盛而上虛．故其耳目不聰明．而手足便也

天地は万物の上下である…陽はその精が上に集まり、精が上に集まれば、上は明るく下は虚となる。だから、耳目を聡明にさせるが、手足はおろそかとなる。陰はその精が下に集まり、精が下に集まれば、下は盛んになり下は虚となるために、耳目ははっきりしなくなるが、手足は機敏になる。

この記述では人の活動について、目・耳のある頭部を身体の頂点として、身体内をめぐる「精」の上下方向の運動によって捉えている。つまり、天一地の関係を、身体における頭と手足との関係と対応させて考えているのである。さらに、『素問』三部九候論篇第二十には身体と天地との関係について次のような記述がある。

人有三部．部有三候…三部…有下部．有中部．有上部．部各有三候．三候者．有天有地有人也…上部天．兩額之動脈．上部地．兩頰之動脈．上部人．耳前之動脈．中部天．手太陰也．中部地．手陽明也．中部人．手少陰也．下部天．足厥陰也．下部地．足少陰也．下部人．足太陰也．故下部之天以候肝．地以候腎．人以候脾胃之氣

人には三部があり、部には三候がある…三部には…下部・中部・上部があり、各部には三候がある。三候には天・地・人の三つがある…上部の天の候は額の両側にある脈動、上部の地の候は頰の両側にある脈動、上部の人の候は耳の前の脈動、中部の天の候は手太陰、中部の地の候は手陽明、中部の人の候は手少陰、下部の天の候は足厥陰、下部の地の候は足少陰、下部の人の候は足太陰である。ゆえに下部の天の候では肝、下部の地の候では腎、下部の人の候では脾胃の気を診断することができるのである。

この記述では、身体を大きく天・地・人の三部に分類している。天に対応する身体の上部は頭部の「経脈」を、人に対応する身体の中部は「手太陰肺経」「手陽明大腸経」「手少陰心経」を、そして地に対応する身体の下部は「足厥陰肝経」「足少陰腎経」「足太陰脾経」を指している。「五藏」のみに着目すれば、横隔膜を境界とした上下の位置関係によって身体の中部・下部が分類されていることがわかる(「肺」「心」は横隔膜よりも上、「肝」「腎」「脾」は横隔膜よりも下に位置する)²⁷。

『内経』におけるそうした分類の根底には陰陽思想が脈々と流れていることは周知の通りである。『内経』における身体論では「五藏」は陰に、「六府」は陽に分類され、そして陰に分類される「五藏」はさらに陰陽に分類され、「肺」「心」の二者は陽、「肝」「腎」「脾」の三者は陰に振り分けられる²⁸。そうした分類は、陽に属する「天氣」が陰に属する「藏」によって身体に取り込まれ、陰に属する「地氣」が陽に属する「府」によって身体に取り込まれるという考え方に直結している。そのことは『素問』太陰陽明論篇第二十九の「喉主天氣、咽主地氣(喉は天の「氣」を司り、咽は地の「氣」を司る)」の記述に集約されている。つまり、「肺」「心」の二者は「喉」に通じるもので、「天氣」を直接的に受ける「藏」と捉えられたものであり²⁹、一方、摂食物によって得られる「地氣」を直接に受ける「府」である「胃」は「咽」に通じるもので、「胃」は表裏関係にある「脾」とともに、全身に対して摂食物由来の「地氣」の供給源として作用すると捉えられたものであるのだ³⁰。そして、摂食物中の清なる成分は、「肺」「心」の二者に送られ、摂食物中の濁なる成分は「肝」と「腎」に送られるというのである。それら摂食物中の清・濁の成分、すなわち陰・陽の「氣」は、「五藏」相互間の生理的ネットワークにより、生命現象を営む陰陽の秩序の中に組み込まれていくというのである。つまり、「五藏」は、天地の「氣」の要所として存在し、そして、「五藏」を貫く「経脈」は、さらに天地をも貫くと捉えられているのである。従って、『内経』の捉える人の生命は、秩序をもつ天地の営みの中に成り立つものであり、そのことは、『素問』寶命全形論篇第二十五に「人以天地之氣生、四時之法成…夫人生於地、懸命於天、天地合氣、命之曰人(人は天地の気によって生じ、四季の時間的規律に従って成る…人は地に生まれ、命は天にまかせ、天地の気がすること、それを人という)」とある記述に集約される通りである。

4. むすび

以上のように、『内経』では視覚的に捉えることのできる形態学的側面での血管、すなわち、西洋医学のいう身体内に閉じた循環器系としての血管に視点があるのではなく、身体内の「脈」の営みに対して、如何にして身体外の要因が集まり、それがまた如何にして身体外に発散して

いくかという身体という形骸の内外を越えたところに視点があるのだ。そのことは、『素問』脉要精微論篇第十七に「夫脉者、血之府也(脈は血の府である)」とあるように「脈」を「府」の範疇で捉えていることから明らかだ。「府」は「集める」という意味を含むものであり³¹、従って、『内経』における「脈」は身体外の要因をもとに生じる「血」や「気」を集め、また身体外にそれらを発散させていく要所と捉えられたものであるのだ。

『内経』では人の生命現象と同様にして、四時や十二の月に集約される周期性をもつ時間的要因を基礎として「五音」「六律」が論じられている。それは、『内経』が「五藏」を「気」という音律に共鳴する身体に備わる楽器と捉えていることを意味するものである³²。『内経』では人の生命現象が四季という周期をもった時間に支配されるという考え方により、主要な「脈」を「経脈」として十二と数えるのである。つまり、『内経』では、四季に根ざす十二の節ごとに身体内外の要因から生じてくる「血」「気」を、天地に通じる身体の「経脈」に周期的に凝集させる営みこそが、人の生命現象の最も基盤であると捉えられているのだ³³。身体という有限の形態を越えて「気」を自然界の規律下に凝集させる営みにおける要所として、「経脈」と「経脈」に直結する「五藏」を捉えるのが『内経』であり、その考えこそが『内経』の最も核心に位置するものであるのだ。

本稿で検討してきたように、玄白らをはじめ玄沢や玄真による西洋の血管系に対する解釈、そして、明末や近代中国の来華宣教師による西洋医学の血管系の概念に関する伝播においても、中国伝統医学のいう「脈」や「絡」、あるいは「経脈」が西洋医学のいう血管に相当するものという前提で論じられていた。一方、玄白が『医事問答』で「全體和蘭人所説之経脈は、直に見候て定候事故、漢人所立とは大きに違ひ、十二経の十四経のと申事無御座候」と述べたのは、西洋医学が動脈・静脈を中心に論じ、詳細な人体解剖図が示されるのをみて、中国伝統医学のいう「経脈」が西洋医学のいう動脈・静脈と同一であるとみなして、中国伝統医学が十二、ないしは十四と数えてきた「経脈」³⁴を一方向的に誤りと判断したことを表すものである。そして、その判断は清任、あるいはホブソンやポスト・ホブソンの医療宣教師でも同様であったのだ。

しかし、『内経』が示す「経脈」、あるいは「脈」「絡」は、「管」の概念とは全く異なるものであり、それらを西洋医学のいう血管系として捉えることは不適切である。そのことは、実際の鍼治療で行う「経脈」上にある穴位(いわゆるツボ)への施鍼が、必ずしも血管そのものを刺すのではなく、従って、施鍼によって出血が伴うとは限らないことから明確である。つまり、玄白ら、あるいは明末や近代中国の来華宣教師は、中国伝統医学のいう「経脈」の性質を十分に理解していなかったのである。その結果、「経脈」を単に「血」の流れる「脈」、あるいは「血」の流れる「絡」という一つの側面でのみ捉え、西洋医学が指す血管系と同一視してしまったの

である。

西洋の近代的な解剖学は人体を一種の精密機械と捉え、身体各部の形態を明らかにすることに主眼をおきながら展開してきたことは周知の通りである。それに対して、『内経』を経典とする中国伝統医学の流れでは身体各部の具体的な形態だけでなく、その機能についても陰陽思想を基礎として独特の「藏府」の概念として帰結させているのである。そして、その機能が波及する身体各部は「経脈」という身体内外を貫くいわば経線として、人の生命現象を天地の名の下に抽象化させて捉えられてきたのである。『内経』のいう「脈」「絡」の概念は、ある場合には特定の形態をもつ存在としての血管と重なるものである³⁵。しかし、『靈枢』決氣第三十の篇に「人有精氣津液血脉。余意以爲一氣耳。今乃辨爲六名…壅遏營氣。令無所避。是謂脉(人には精、氣、津、液、血、脈があり、これらは本来一つの氣と数えていたが、今では六つの氣として分類される…營氣の流れが妄りにならないようさえぎるものを脈という)」とあるように、「脈」はあくまで「氣」の一類であるのだ。それは「營氣」が妄りに流れないようさえぎるはたらき、すなわち、身体を流れる「氣」に一定の方向性をもたせる作用そのものに「脈」の本質があり、あくまで特定の形態に限定されない機能面としての「氣」と捉えられたものであるのだ。

日本・中国両国における西洋医学との初期的な接触においては、身体各部の機械的な仕組みや形態を写実主義的に追求しようとする西洋の新たな医学のアプローチと、それに伴って西洋解剖学の各語彙が中国伝統医学の語彙を駆使して訳出されていったことが、結果的に『内経』の説く身体観の根本的意義を風化させることになったのである。

中国伝統医学がいう本来の「脈」「絡」は、西洋の解剖学が追求する具体的な形態を指す血管系とは根本的に性質を異にするものであり³⁶、それは西洋医学に絶対的な価値観において身体を論じる今日において、中国伝統医学の本質を見誤らないようこれを再び探究していくために特に留意されるべきことである。

【注】

1 本稿で『素問』『靈枢』はそれぞれ『重廣補註黄帝内經素問』（明翻北宋本影印）、『靈枢經』（明趙府居敬堂刊本影印）『四部叢刊』上海商務印書館、1935 参照。

2 本稿でオランダ語版 *Ontleedkundige Tafelen* ならびに『解体新書』は小川鼎三監訳、酒井恒編訳『ターヘル・アナトミアと解体新書』名古屋大学出版会、1986 参照。なお、オランダ語版 *Ontleedkundige Tafelen* はディクテン (Gerardus Dicten 1696?~1770 和蘭) による訳。

3 建部清菴、杉田玄白『和蘭医事問答』寛政七年(1795)(『杉田玄白集』早稲田大学出版部、1994 影印)参照。

4 杉田玄白新訳、大槻玄沢重訂『重訂解体新書』文政九年(1826)東都書肆 千鍾房、京都大学附属図書館蔵、ならびに宇田川玄真『医範提綱』風雲堂、文化二年(1805)、九州大学附属図書館医学分館蔵参照。

5 『重訂解体新書』身體元質篇第三名義解に「要之不出於動靜二血脈統之名曰アーテルス即脈也…漢所謂經絡血脈皆是也。雖則名與物稍同。其體質起止。循行主用。皆與西說 迥異也」とあることによる。この一節で玄沢は、中国伝統医学のいう「経絡」「血脈」が西洋医学のいうアーテルとが、実質上大きく異なるものであることも認識していることから、玄沢は、両者が概念的な部分で通じるものと捉えたとみられる。なお、同書身體元質篇第三名義解に「單稱アーテル以爲一名者何也。今竊考之。古昔解體術未起時人唯觀此脈浮起於皮表。血色透見。而指以爲血液通流之道路。因直命曰脈(自注；アーテル)或血脈(自注；ブルードアーテル)而已。後來…遂明晰有動靜二血脈及諸脈」とあるように、玄沢がブルードアーテルを玄白のように「血脈」ではなく、中国伝統医学の語である「脈」としたのは、玄沢がアーデル単独の語が存在することに着目し、これが西洋解剖学の初期の頃の認識に由来すると解釈した上で、血管系においてアーデルが最も基礎となる概念であると捉えたことによるとみられる。

6 動脈としてのArteriaeの本来の意味は空気の通る管であり、それは古人が行った解剖は、動脈にある血液が抜けてしまった後の状態を観察したもので、あたかも空気が通る管のようだったことから生じた誤謬によるものとされる。静脈は動脈と異なり血管内壁に弁がついているために、解剖時に直ちに血液が抜けてしまうということはない。静脈としてのVenaeの本来の意味は広く脈様のものを指すもので、その語源はVasaである。

7 他に広義の血管を指す意味で、Vatenの語が用いられているが、これもおよそ脈の意である。なお、ここで論じたラテン語とオランダ語による血管系の語彙は、オランダ語版*Ontleedkundige Tafelen*のDerde tafel(「第三表」の意；『解体新書』では格致篇第三として訳出される)から抜き出した。

8 本稿で『人身説概』は上海図書館蔵抄本、ならびに中国中医研究院図書館蔵抄本(両者本文に異同はほぼみられない)を、『人身図説』は中国中医研究院図書館蔵抄本参照。『人身図説』を編纂したGiacomo Rho(中国名 羅雅谷 1592～1638 伊)は、1622年に来華したとされる。また、『人身図説』の編纂にあたっては他に、『人身説概』を編纂したJohann Terrenz Schreck(中国名 鄧玉函 1575～1630 独)と、マテオ・リッチ(Matteo Ricci 中国名 利瑪竇 1552～1610 伊)の中国での宣教活動を直接に継いだとされる1597年来華のイエズス会士Nicolas Longobardi(中国名 龍華民 1559～1654 伊)が校訂に係わっている。なお、『人身説概』の書誌に関しては、沈国威『泰西人身説概』(1623)から『全体新論』(1851)まで 関西大学中国文学会紀要第21号、2000に詳細な論述がある。

9 『人身説概』脈部に「脉中之血」「脉分派黄血于身」の記述があるように、「脈」の語は血液の流れという認識のものである。

10 なお、『人身説概』では心臓を中心とする血液循環の内容を備えておらず、ハーヴェイ(William Harvey, 1578～1656 英)が『心臓と血液の運動について』(1628)ではじめて唱えた心臓を中心とする“血液循環説”は反映されていない。こうした医学史的背景を踏まえる必要があるが、一般的にハーヴェイより前の血管系についても、今日のいう動脈・静脈の語を用いて表現していることに従い、本稿でも便宜上『人身説概』のいう「脈」「絡」を、それぞれ順に今日のいう動脈・静脈とした。

11 『素問』徴四失論篇第七十八に「經脉十二。絡脉三百六十五」、『靈枢』邪氣藏府病形第四の篇に「十二經脉。三百六十五絡」、同書脉度第十七の篇に「經脉爲裏。支而横者爲絡。絡之別者爲孫」とある

ことから、『内経』で「絡脈」ないし「絡」は「経脈」よりも規模が小さく数の多い支流であると考えられている。

12 『人身図説』論脈絡之源及分散之始下行分肢の篇ではさらに「蓋凡血絡皆發生於肝。凡脈絡皆發生於心」の記述があるように、この書においてもハーヴェイの“血液循環説”は反映されていない。本稿では、先の『人身説概』と同様にして、便宜上『人身図説』のいう「脈絡」「血絡」を、それぞれ順に今日のいう動脈・静脈とした。なお、『人身図説』では「脈絡」「血絡」以外に「絡脉」の訳語が特に定められているが、同書論脈絡之源及分散之始下行分肢の篇に「絡脉是由肝至心之血絡」と説明されるように、これは今日いう肝静脈に相当する静脈を指すものである。西洋の人体解剖学では、ハーヴェイの“血液循環説”が発表されるまで、心臓だけでなく肝臓についても血管系に直接係わる臓器として重視し、そして肝臓から心臓に伸びる肝静脈についても特に重視していた背景があり、『人身図説』が特に定めた「絡脉」の訳語は、このことを反映したものとみられる。

13 本稿では『華英字典』の呼称を用いたが正しくは *A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE IN THREE PARTS*. PART I は『字典』、PART II は『五車韻府』の中文名がある(PART III に中文名はない)。早稲田大学附属図書館蔵本原書影印、ゆまに書房、1996(華英辞書集成)参照。ホブソンはモリソンの女婿で、ホブソンが同書を参照した可能性は高い。

14 なお、『英華韻府歴階』では、「Artery 脉筋」「Vein 血筋」「Capillaries 小血筋」とあるように、広義の血管を「筋」、ないしは「血筋」としているが、artery、すなわち動脈に対してのみ「脉」(脈の異字体)の語が当てられていることから、やはり、「脈」に含まれる拍動の意をとっていることが伺える。S. Wells Williams, *An English and Chinese vocabulary*, the Office of the Chinese Repository, 1844(衛三畏鑑定『英華韻府歴階』道光癸卯年鐫、香山書院梓行)。立教大学図書館蔵参照。

15 合信『全体新論』江蘇上海墨海書館蔵版、咸豊元年(1851)、上海図書館蔵、ならびに Benj. Hobson *A MEDICAL VOCABULARY IN ENGLISH AND CHINESE* (『医学英華字積』) SHANGHAI MISSION PRESS 1858. 立教大学図書館海老沢文庫蔵参照。

16 王清任『医林改錯』京都隆福寺胡同三槐堂書舗、道光10年(1830)初刻本(中国中医研究院図書館蔵)参照。

17 この「管」に関する語釈は、『字典』『五車韻府』の両書ともにみられるものである。

18 『医林改錯』脳髓説に「津液在氣管」、同書氣血合脉説に「寒入氣管。管中津液必凝」とあることによる。また、清任は「氣管」を「衛総管」とも呼んでいるが、同書脳髓説には「衛総管…此管乃存元氣与津液之所」とあるように、「衛総管」に関する記述でも「氣管」同様に「津液」の存在を説明している。

19 ホブソンが、『医林改錯』の「回血管」と区別するために、一般的ではない「廻」の字を故意に用いたということは、『全体新論』の複数の箇所でも「廻血管」とすべきところを、「回血管」と誤って記しているということからも判断されよう。

20 柯為良『全体闡微』保福山聖教医館、光緒七年(1881)、上海図書館蔵、Harvard-Yenching Library 蔵参照。『全体闡微』の概要については、拙稿「ポストホブソンの中国文西洋医学書について」『或問』第13号、近代東西言語文化接触研究会 2007、神経の訳語に関する医学史的な詳細については拙稿「清末刊行の中国文人体解剖学書について」『日本医史学雑誌』第53巻第4号、日本医史学会 2007(同学会学術奨励賞受賞論文)を参照。

21 『全体闡微』全體經絡論には唯一「經絡分爲三．一爲脉管．一爲廻管．一爲微管」の一節がみられるが、『全体闡微』全体を通してみる限り「血管」の語が広義の血管の訳語として用いられているために、この一節でいう「經絡」とは広義の血管を指すものではなく、血管系という体系そのものを指していると考えられる。

22 徳貞『全体通考』同文館、光緒十二年(1886)、筆者蔵、博恒理『省身指掌』京都燈市口美華書院、1891(および1897年増訂版)、Harvard-Yenching Library蔵、および、Philip B. Cousland, *An English-Chinese Lexicon of Medical Terms*, Medical Missionary Association of China Shanghai, 1908(『医学辞彙』、博医会)、Harvard-Yenching Library蔵参照。『全体通考』の詳細については、前掲「清末刊行の中国文人体解剖学書について」参照。

23 『康熙字典』上海書店、1985(康熙五十五年御製本影印)、1235頁参照。

24 前掲『康熙字典』1235頁参照。孟は[正一(正の第四画)+血]の漢字である。『康熙字典』で孟は、増補として加えられたものである。

25 なお、『医学辞彙』INTRODUCTIONにあるAnatomyの項目では循環器系の基本語彙(Auricle Ventricle Artery Vein Capillary Serum Lymph)がそれぞれ血につくる漢字一文字で統一して定められている。「絡」のみはそこから漏れたものとみられる。

26 『靈枢』脉度第十七の篇の文脈では、「氣」の流れの方向を指して「從足上至頭」と述べているわけではなく、脈の長さを測るための起点と終点を述べている。「氣」の流れの方向は、同書逆順肥瘦第三十八の篇に「足之三陽．從頭走足」とある通り、頭から足への方向である。

27 一般には、『靈枢』九鍼論第七十八の篇に「六府膈下三藏應中州」とあるように、「六府」と「肝」「腎」「脾」の三つの「藏」が横隔膜より下にあるという認識で、今日の解剖学の認識と同様である。ここで「大腸」を特に中部としていることについては、横隔膜の直下を通るものであるが、『靈枢』本輸第二の篇に「大腸屬上…肺合大腸」とあることから、「胆」「胃」「大腸」「小腸」「三焦」「膀胱」の「六府」の中でも特に天に係わると解釈されたことによるみられる。なお、『素問』五藏別論篇第十一に「腦髓骨脉膽女子胞．此六者．地氣之所生也．皆藏於陰而象於地．夫胃大腸小腸三焦膀胱．此五者．天氣之所生也．其氣象天」とあるように、「胆」は地に対応するもの、「胃」「大腸」「小腸」「三焦」「膀胱」は天に対応するものと捉えられるように、『内経』には「藏府」に対する様々な視点がある。

28 『素問』金匱真言論篇第四に「肝心脾肺腎五藏．皆爲陰．膽胃大腸小腸膀胱三焦六府．皆爲陽…背爲陽．陽中之陽．心也．背爲陽．陽中之陰．肺也．腹爲陰．陰中之陰．腎也．腹爲陰．陰中之陽．肝也．腹爲陰．陰中之至陰．脾也」とあることによる。これでは、さらに第三の陰陽分類がなされている。

29 『靈枢』邪客第七十一の篇に「宗氣積于胸中．出於喉嚨．以貫心脉．而行呼吸焉」とあることによる。「宗氣」とは一般に呼吸によって得られる「天氣」に由来すると考えられる。

30 『靈枢』玉版第六十の篇に「人之所受氣者．穀也．穀之所注者．胃也．胃者．水穀氣血之海也…胃之所出氣血者．經隧也．經隧者．五藏六府之大絡也」とあるように、「胃」が全身への「氣」の供給源として最も中心的な役割を果たす。

31 『説文解字』(許慎撰『説文解字』清同治陳昌治本影印、中華書店、1963参照)によれば「府」の見出し語に「文書藏也」とあるように、「府」が「藏」に通ずる語として捉えられていることがわか

る。また、『玉篇』(前掲『康熙字典』にある引用参照)では「府聚也。藏貨也」とあるように、「集める」という意味のあることをより明確に示している。「府」が「藏」に通じるという背景は、身体語彙としての「藏府」にも反映されており、『素問』五藏別論篇第十一では「夫胃大腸小腸三焦膀胱…此五者…寫而不藏。此受五藏濁氣。名曰傳化之府。此不能久留輸寫者也」とあるように、「府」に「濁氣」が集中する性質を説明した上で、「氣」を長く留めることのできない点で、「五藏」の性質との違いを述べている。

³² 『靈樞』九鍼論第七十八の篇に「六者律也。律者。調陰陽四時。而合十二經脉。虛邪客於經絡。而爲暴痺者也」、同書邪客第七十一の篇に「天圓地方。人頭圓足方以應之…天有四時。人有四肢。天有五音。人有五藏。天有六律。人有六府…地有十二經水。人有十二經脉…此人與天地相應者也」、そして、同書經別第十一の篇に「人之合于天道也。内有五藏。以應五音五色五時五味五位也。外有六府。以應六律。六律建陰陽諸經。而合之十二月。十二辰。十二節。十二經水。十二時。十二經脉者。此五藏六府之所以應天道。夫十二經脉者。人之所以生。病之所以成」とあることによる。詳細は、拙稿「古代中国の生命論—氣と音楽をめぐる—」『境界を越えて』第6号。立教比較文明学会、2006参照。

³³ このことは、『靈樞』五亂第三十四の篇に「經脉十二者。以應十二月。十二月者。分爲四時。四時者。春夏秋冬。其氣各異。營衛相隨。陰陽已和。清濁不相干」と記されることから明らかである。ここで、「營」「衛」とは「氣」の分類である。

³⁴ 中国伝統医学のいう「十二經」ないしは「十二經脈」とは、「手太陰肺經」「手陽明大腸經」「足陽明胃經」「足太陰脾經」「手少陰心經」「手太陽小腸經」「足太陽膀胱經」「足少陰腎經」「手厥陰心包絡經」「手少陽三焦經」「足少陽胆經」「足厥陰肝經」を指し、「十四經」という場合にはこれら「十二經」の他に、「任脈」と「督脈」を加えた数え方である。「十二經」は、經脈の中でも「五藏六府」と直接的に関係するということから、最も重視されるものであるが、「任脈」「督脈」の両者も重要性が高いと認識されるために、中国伝統医学ではこれらを含めた「十四經」の呼称も一般的である。

³⁵ たとえば、『靈樞』經脉第十の篇に「經脉十二者。伏行分肉之間。深而不見…諸脉之浮而常見者。皆絡脉也」とあるには、「十二經脈」が身体の深層部を走る動脈、「絡脈」が身体の表層部を走る動静脈を指すものと理解されよう。また、同書脉度第十七の篇に「經脉爲裏。支而橫者爲絡。絡之別者爲孫」とあるには、「經脈」「絡」「孫(絡)」の順に血管の太さが細くなるということを描したものと理解されよう。

³⁶ 『靈樞』骨度第十四の篇に「先度其骨節之大小廣狹長短。而脉度定矣…此衆人骨之度也。所以立經脉之長短也。是故視其經脉之在于身也」とあるが、身体の「骨」を「節」ごとに測ることで、あくまで間接的に「經脈」の長短を推測するという方法を採用しているように、「經脈」の具体的な形態に視点があるわけではない。